慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	レヴィナスにおける主体性の起源の問題
Sub Title	Le problème de l'origine de la subjectivité chez Lévinas
Author	村上, 暁子(Murakami, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2016
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.9, (2016.) ,p.85- 108
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20160000-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

レヴィナスにおける主体性の起源の問題

村 上 暁 子

エマニュエル・レヴィナス（1906-1995 年）は、一般に、「存在論」を批判して「倫理」を重視したことで知られている。しかし彼の思想の変遷に目を向けると、全体性の外部たる無限として立ち現れる他人との関係を「倫理」として規定する以前に、創造や性の主題を扱っていることが目につく[1]。なぜレヴィナスは、人間を無から創造され、性を有する存在者として描き出したのだろうか。存在論から倫理へと視座を移す必要性を理解するうえでも、こうした主題の背後にある問題意識の解明を試みることには一定の意義があるのではないかと思われる。そこで本稿では、先の二つの論点のうち「創造」の問題に光を当てたいと考える。ただしレヴィナスが取り上げているのは、万物の創造ではなく、この私の出来、生起にかかわる創造、つまり主体性の起源である。この主体性の起源の問題に着目することで、他者に応答する可能性、「責任」のもとで人間の主体性を捉えるレヴィナスの思考の枠組みを剔抉しうるのではないかとの考えから、本稿では、以下の順序で考察を進める。まず、レヴィナスが存在を人間の原因ないし起源として規定する発想を退け、創造と性の論点を導入して主体性論を展開する経緯を概略的に述べる（第Ⅰ節）。次に、主として 1930-50 年代の論稿を取り上げつつ、存在論から脱却して他人との関係としての倫理を論じる背後にある問題意識を浮き彫りにしたうえで（第Ⅱ節）、1965 年頃に登場する「隔時性」概念が表現する主体の時間構造を解明し、主体性を創られたものとして描き出す狙いについて考察する（第Ⅲ節）。

Ⅰ　創造と性の論点

1949 年の論稿「記述から実存へ」において、レヴィナスは以下のように述べている。

> 〔…〕人間と存在との連関はもっぱら存在論（ontologie）なのだろうか。それは了解ないし了解不可能性から分かち得ないほどに混ざりあった了解、すなわちわれわれが存在を支配することのただなかにおけるわれわれに対する存在の支配なのだろうか。換言すれば、支配を介して実存は成就するのだろうか。例えば創造の観念が示唆するような関係は、未だ古代の宇宙論的顧慮が支配的であった中世哲学において考えられていたような原因（cause）の観念によって汲み尽くされてしまうのだろうか。あるいはそれは、人間から世界及び自己自身を統御する支配力を奪ってしまうような了解不可能な起原（origine）の観念によって、汲み尽くされてしまうのだろうか。被造物としての人間、あるいは、性的存在としての人間は、存在とのあいだに、存在に対する権能（puissance）による関係や隷属関係、あるいは能動性と受動性としての関係とはまた異なる関係を保持しているのではないだろうか。（EDE 151）

ここには、存在を人間の原因ないし起源として理解してきた西欧哲学の伝統に対する問題提起がみられる。確かに、存在は伝統的に存在者の本質（essence）や本性（nature）として措定され、生成消滅するものの根源にあると考えられてきた。「存在論」と呼ばれるハイデガーの発想においても、存在を自らの起源にあるものとして了解する存在者が中核に据えられている。存在者と存在一般のあいだの差異、「存在論的差異」のうちに人間を位置づけるこの発想は、創造の問題を、了解可能な原因ないし了解不可能な起源としての存在が人間を支配する図式のもとで理解しているか

ぎりで、伝統的な存在理解の枠組みのうちにとどまるのではないか。先の引用のうちには、存在と人間が因果論的に連関していると考える発想一般に対するこうした問題提起を見て取ることが出来る。

この問題意識は、1951 年の論稿「存在論は根源的か」において、存在論に対抗して他人との関係性を前面に打ち出す際にもあらわれている。この論稿では、「他人との関係は存在論ではない」[2]と主張され、「人間なるもの（l'humain）は一つの権能（pouvoir）ではないような関係においてしか与えられることはない」（EN 24）という言葉で締め括られている。ここには、人間に固有のありかた、「人間なるもの」[3]を、存在論の用語に分類される「権能」とは別の枠組みで語る戦略の一端が見出される。しかしながら、先の引用文の最後に示された「被造物としての人間、あるいは、性的存在としての人間」への眼差しは、存在論を脱して他人との関係を語る方針とどのように関連しているのだろうか。この論稿で「他人の倫理的意味作用」（EN 21）に着目したレヴィナスは、その後「倫理」について多くを語るようになるが、その議論において、創造と性の論点はいかなる位置を占めているのだろうか。網羅的な検証に踏み込むとかえって本稿の目的から逸脱する危険があるため、以下本節では、公刊著作におけるこれら二つの主題の扱われ方について最小限のポイントのみを押さえておきたい。

性の問題系に属する論点としては、例えば「女性的なものの他性」（altérité du féminin）（TA 85）との関係として他なるものとの差異性を形象化する 1946-47 年の講演録、『時間と他なるもの』後半部の議論[4]が挙げられる。この主題は『全体性と無限』（1961 年）に引き継がれ、新たなものを産出する「多産性」（fécondité）（TI 244）としての時間性をめぐる第四部の議論に結実する。しかしそこで扱われた「エロス的関係」の枠組みは、その後はむしろ他人との「倫理的関係」を際立たせるために否定的な仕方で参照されることが多くなり（Cf. HAH 88 / DV I13）、主題として積極的に展開されることはなくなる[5]。

一方、創造の問題系に属する論点としては、例えば『実存から実存者へ』（1947 年）の「始まりの瞬間」をめぐる議論のうちで登場する「無からの創造」（la creation *ex nihilo*）（DEE 16）という主題が挙げられる。そこで「創造の瞬間」は、起原の問題を原因の問題として捉えてきた哲学的分析を免れる「被造物の時間の神秘」（DEE 131）として分析されている。また『全体性と無限』（1961 年）には、被造物と創造主の絶対的分離ゆえに「全体性のうちには統一されない多数性」[6]を形成する社会の創設をめぐる議論があり、この論点はその後さらに展開されている。この著作結論部の「創造」と題された一節において、自らの始源／原理（principe）において自己を掌握しうるような特権的平面の不在として「多数性に本質的な無起源（anarchie）」（TI 270）と呼ばれた発想は、のちに、自らの起源としては把握しえない「過去」と結びついた主体性を表現する「無起源」（an-archie）（HAH 73 等）という概念に結実するのである。この概念は、『他なる人間の人間主義』（1972 年）や『存在するとは別の仕方で』（1974 年）において、「自分自身の目的であり起源であるような人格の観念」（AE 203）を解体し、主体性概念を再構築する企てを下支えする発想として登場している。

以上、レヴィナスの歩みにおける性と創造に関連する主な主題の扱われ方を概略的に振り返るなかで、とくに創造の主題が主体性の起源をめぐる問いと結びつけられていることが確認できた。レヴィナスは、創造の問題を提起することで、先にまとめたような存在理解に基づく人間規定を批判し、人間の実存（existence）[7]の問題に別の角度から光を当てているのではないだろうか。ここからは、存在論批判に始まり、他人とのあいだの倫理的関係に着目する中で、やがて人間の主体性を起源を欠いたものとして規定するに至る彼の思考の筋道を再構成することで、この仮説を検証したいと考える。

Ⅱ　存在論批判の背景

本節では、ハイデガーの『存在と時間』（1925 年）を意識しつつ存在論の枠組みを乗り越えようとするレヴィナスの問題意識の解明を試みる。そもそもレヴィナスは「存在論」や「存在の思惟」（DMT 141）という語でハイデガー哲学を代弁させることが多いが、彼の初期からのハイデガー評価は、フライブルグ留学時の熱狂的受容の雰囲気を伝える「フライブルグ、フッサール、現象学」（1931 年）（IH 81-92）、存在了解を人間の本質的属性ではなくその存在様式そのものとして規定し、存在了解の出来事として時間を規定する『存在と時間』の発想の新しさを評価する「ハイデガーと存在論」（1932 年）（EDE 77-109）、人間と存在との関係を能動・受動といった支配の用語で記述する存在論に対する疑念を呈した「記述から実存へ」（1949 年）（EDE 129-151）など、年を追うごとに変遷がみられるものの、「存在論は根源的か」（1951 年）（EN 13-24）で他人との対話関係に着目し、ハイデガー的存在論に対抗する姿勢を明確にして以来、この点に関し解釈の変更は行っていない。そこで、ここからは、ハイデガーの発想と対比しつつレヴィナスの議論の明確化を試みる。

ハイデガーが「存在了解」を語るのに対し、レヴィナスは、その最初期から、存在が否定しがたい事実として了解を拒む仕方で現前し、それによって違和感や嫌悪感を掻きたてられる情動的触発の事態に着目している。例えば、1935 年に発表された論稿「逃走について」には、「存在がある」（*il y a de l'être*）という真理が「釘付けにされている」（être rivé）という感情のうちで露になるという洞察が見られる[8]。レヴィナスによれば、存在に縛り付けられ、決して逃れられないことによって生じる「吐き気」（la nausée）[9]という感情においては「存在それ自体の構造」（DE 388）が露わになる。このとき存在は、引き受けることも承認することもできず、忌避することもできない仕方で現象するとされる。

存在者としては特定できない「雰囲気」に呑み込まれるが如くに「存

在する」という裸の事実が現前するこの状況は、「世界」という地平を括弧入れにすることで浮き彫りになるものでもある。ハイデガーにおいて現存在は、自らが根源的に慣れ親しみ身を落ち着けている一定の「有意義性」（Bedeutsamkeit）の全体として開示された「世界」の内部にある「世界内存在」と捉えられていた。そのかぎりにおいて現存在は、存在するものを、特定の用途のもとにあるものとして指示する「用具連関」（Bewandtniszusammenhang）のうちに納まった「道具」として見出すことができる（SZ 83-88 (§18) / 368 (§70)）。これに対し、レヴィナスが呈示する「吐き気」のうちにある者は、用途や意義を指示する文脈としての「世界」という地平を欠いているがゆえに、この状況を外部から意味づける術を持たない。かくして、それとして識別できるような意義をもつ「もの」がすべて消え去り、「私」と存在の区別さえもが判然としなくなる。この意味で、違和感や嫌悪感を覚えつつも、何がこの苦しみをもたらしているのかが判然としない状況こそが、「吐き気」という現象の正体であると言える。

「実詞的なもの」（substantif）の一切が消失し、存在を引き受けるような主体がいないことから、この状況は、「存在の非人称的で匿名的だが消すことのできない焼尽（consumation）」（DEE 93-94）の様相を描写する「ある」（il y a）という概念で表現されることがある。存在から距離を取れず、存在者が存在作用と渾然一体化して消え去りかねない事態は、この概念が用語化した論稿「ある」（1946 年）において、主体の主体性を脅かす「恐怖」の相貌として描き出されている。

> 〔…〕恐怖は主体の主体性（la subjectivité du sujet）、存在者（*étant*）としての主体の特殊性を転覆する。恐怖とはあるへの融即（participation à l'*il y a*）である。あらゆる否定のただなかで回帰するあるへの、「出口なし」のあるへの融即である。言ってみれば、あるとは死の不可能性であり、実存の無化においても存続する実存の普遍

性（l'universalité de l'existence）である。[10]

同時期の『実存から実存者へ』（1947 年）においても、レヴィナスは、「無」に対峙するハイデガー的現存在の「不安」とは異なる、「存在することの恐怖」（DEE 99）、諸物を識別可能にする光に照らされることのない「夜の恐怖、闇夜の沈黙と恐怖」（DEE 102）を記述している。このとき「恐怖」において現前しているのは、何らかの内容を持つ存在者ではなく、「非人称の出来事」としての「ある」という存在作用である。彼は、死してもなお在り続けることに怯える現象を分析しつつ、存在が存在するという事実が文字通り「出口なし」の内在であることを浮き彫りにしている[11]。その背景には、「無の観念は抹消された存在の観念に等しい」（DEE 103）とするベルグソンの『創造的進化』の発想がある。レヴィナスは、識別しうる存在者がいないという事実さえもが存在として現前せざるを得ないということに着目して、存在の外に無を想定することは誤りであり、存在が、存在と無を含む一切を包括する「内在性」（immanence）、一切の「超越」（transcendance）の不可能性として立ち現れることに注意を喚起しているのである。

「ある」という存在作用の現前において、「私」は「主語」（subjectif）として存在を支配下に置くどころか、自存性を保つことができぬまま存在のうちに溶けこんでしまっている。先の引用にあったように、その状態をレヴィナスは「融即」と表現している。従来、哲学的文脈では「参与」や「分有」と訳されてきた participation の語がレヴィナスの著作において「融即」と訳されているのは、レヴィ=ブリュールの邦訳に即した慣例である。彼が参照した『未開社会における心性』（1910 年）では、一神教に対して「未開」ないし「原始的」と形容される諸宗教を分析するなかで、「恐怖」の感情において主客の反転と混同が起こる事態が、存在への「融即」として語られている[12]。これを踏まえてレヴィナスは、1957 年の論稿「レヴィ=ブリュールと現代哲学」において、「融即」概念を、主客未分化

な情緒的総合としての世界の現れにおける存在作用との直接的接触、と規定している。この語は、「存在すること」のうちに人間的実存が絡めとられている状況を、観照とは全く異なる実存の様式である「超自然性、神秘性という範疇」（EN 57-58）において表現しているのである。

このことから分かるように、レヴィナスにおいて「実存」（existence）は、存在者の属性として付加される「存在性」のような静的なものではなく、「存在する」という働きそのものに存在者が従属し、存在者が存在を所有すると同時に存在によって支配されるというダイナミズムのもとで捉えられている（EN 56-57）。それはあたかも、人間が「聖なるもの」（le sacré）[13]の畏怖によって平伏させられ、否応なく触発されているかの如き様態である。このように、「世界」という意義の地平を保留することで、レヴィナスは、「現存在／そこにあるもの」（être-là）が想定する「そこ」への繋縛が、存在者の存在への「融即」という出来事によって支えられたものであることに光を当てている。そしてさらに、存在作用に服することで生じる「吐き気」や「恐怖」といった情動的触発の様態を分析することで、「存在論的差異」に基づくこの存在と存在者との癒着関係を浮き彫りにしていくのである。

先に見たように、存在に釘づけにされているという事実に対する「吐き気」や、存在に呑み込まれ自分を見失うことへの「恐怖」は、「存在することの苦痛／悪」（mal d’être）[14]という現象を告げている。このことが意味するのは、一箇の存在者にとって「存在すること」、「実存」とは善悪無記の現象ではないということである。純然たる作用としての存在に全面的に曝されることで、存在者の主体性は脅かされる。存在は、一箇の主体によって引き受けられるようなものではなく、引き受け不可能な相貌を呈するものなのである。このことにより、存在のうちにあることに違和感を覚える「私」が逆照射される。存在することが「苦痛」であり「悪」であるのは、「私」が存在と一体化して充足している訳ではなく、無意味にして匿名的な存在から距離を取ろうと足掻く一箇の存在者としてあるからな

のである。

存在が外部なき「内在性」である限りにおいて、存在者が存在することはその外から意味づけられない裸の事実である。しかしレヴィナスは、存在者として存在作用に服する「私」にとって、この純然たる事実が「悪／苦痛」の現象から切り離せないことに注意を喚起している。ここには、「なぜ存在があるのであって無があるのではないのか」という問い以上に、「なぜ善ではなく、悪が存在するのか」という問いを重視する姿勢[15]が表れている。「存在することの苦痛／悪」をめぐるこの問いに答え、存在に意味を与えるには、存在と存在者の関係である「存在論的差異」では不十分であり、存在とは他なるもの、すなわち「他者」との関係に目を向けねばならない。こうした問題意識のもとに、レヴィナスは、他なるものとしての死や未来、他人とのかかわりに光を当てていくのではないかと思われる。

以上のようなレヴィナスの議論は、存在論的問題設定から脱して、存在の「内在性」（immanence）によって苦しめられている一箇の存在者を起点に、「内部性」（intériorité）（DEE 73 等）の問題を提起するものではないかと思われる。ここで「内部性」と「内在性」は日本語の語感としては近いものの、全く異なる事態を表現している。先に見たように「内在性」は出口がなくそれ自体で完結している様を表現しているが、「内部性」はむしろ、外部と境界を接しつつ内側にある様を表現しているからである。ただしそれは、外からの影響を受けない純然たる「内面性」として想定されているのではない。むしろレヴィナスは、内部も外部もない情動的触発の様態から出発して、いかにして存在者が生起し、「内部性」をもつのかについて考察している[16]。それがのちに他人との関係である「倫理」の成立に関わるものとして論じられるのである。

こうした発想に対しては、存在に対する存在者の優位を主張し、ある種の存在者的形而上学の枠組み内で「倫理」を説くものであり、ハイデガーの枠組みを乗り越えていないのではないか、という疑問が呈されること

がある[17]。しかし先に見たように、レヴィナスは、存在するという動詞に対し存在者という実詞の優位を唱え、存在者の実体性（substantialité）に立ち戻ろうとしているわけではない[18]。この点に関しては、先に挙げた「創造」という論点が参考になる。レヴィナスはその初期から、人間的実存における「始まり」という契機について、存在と存在者のあいだの差異性である「存在論的差異」ではなく、被造物とその創造の業のあいだの連関に着目して論じている。しかし単に存在に対する存在者の優位性を確立するだけであれば、人間が創られたものであるという側面を強調する必要はないだろう。本節までの考察を踏まえるなら、レヴィナスが「無からの創造」の観念に依拠して被造物としての人間を語るのは、存在を人間の起源に据える存在論の図式から脱却するためではないかと推察される。「被造物」という規定は、無意味な「内在性」そのものであるような存在に意味[19]を与えることを可能にする「存在とは他なるもの」との関係を表現しているのではないだろうか。われわれは、レヴィナスの存在論批判は、存在と存在者の連関の外部、他者との関係なしには存在は有意味化されえないという洞察に根差したものではないかと考えている。

なかでも 1965 年頃に登場する「隔時性」概念は、被造物の時間性に関する考察を示している点で、先の問題意識を引き継ぐものであるように見える。そこで次節では、この特異な時間性概念を分析したいと考える。

Ⅲ　被造物の時間性

本節では、「隔時性」概念が代弁する時間性の特徴を明らかにするため、主として『存在するとは別の仕方で』（1974 年）の記述を参照する（必要に応じて論文集『他なる人間の人間主義』（1972 年）に収められた諸論稿も取り上げる）。この著作には、西欧哲学において「創造」の観念が「存在論の用語で、つまり、先在する不壊の一質料の関数として」（AE 174）考えられてきたことを批判する箇所があり、第一節で確認した問題意識が

一貫していることが見て取れるためである。これから紹介するように、レヴィナスにとって「隔時性」（diachronie）[20]という語は、同時に現前しえない複数の項の隔たりを介した結びつきを表現し、意識によって措定される起源の手前と主体性が結びつく時間構造を表現している。この発想の背後には、「理念的始源／原理」（principe idéal）に基づいて自己同一性を保つ「意識としての主観性」（AE 156-157）[21]という発想がある。そこで、まずこの点から確認しておこう。

一般に、近代以降の西欧哲学においては、対象を再現前化する意識の働きに基づく主観性が重視されてきたが、レヴィナスは、この意識が対象と同時的なものとなることに注意を喚起している。意識の働きは、何ものかを何ものかとして思念すること（meinen）――このフッサールの用語は「言い張る／主張する」の含意のある prétendre で訳され「宣布的」（kerygmatique）（AE 62）と呼ばれる――としての「同定」（identification）に基づいている。このとき、何ものかが何ものかとして「現前」（présent）するのは、意識の「現在」（présent）においてである。主観性そのものも、この意識の「現在」のうちで自己意識として成立している。また、意識は、想起や予期（現象学の用語では「把持」（retention）と「予持」（pretention））によって時間的位相差を解消し、時間の流れを一貫したものとして構成する働きでもある。たとえ「創造の瞬間」のような過去の出来事であっても、想起され再現前化されうるかぎりにおいて、意識の「現在」と同時的なものとなる。かくして主観性は、自らの起源を我有化し、時間を貫く自己同一性を保つことができるのである。ここで意識の「現在」は、現象するもの一切の起源と見做されうる。

レヴィナスにおいて、「隔時性」としての時間性は、意識によるこの「想起」の時間性との対比のもとで語られている[22]。それによれば「隔時性」とは、「一者が、自分自身と同時的な一つの実体として、超越論的な一つの〈自我〉（Moi）として、自己に再び合流し、自己と同一化することを妨げる」（AE 95）時間性のことである。意識を起点とするとき、主

観性は、自己への自我の現前に基づいて自らの同一性を保っている。これに対し、「隔時性」のもとで生起する主体性は、この自己同一化作用を欠いているとされる。例えば論稿「同一性なしに」（1970 年）には、あらゆる他人の「人質」たる「同一性なき人間」（HAH 110）という発想がみられる。この発想は『存在するとは別の仕方で』（1974 年）において、「倫理」と呼ばれる他人たちとのあいだの関係性において生起する「身代わり」の〈自己〉（Soi）として詳しく論じられている。そこでここからは、「人質」にして「身代わり」であるような主体性とその時間構造を見ていこう。

レヴィナスの考える「倫理」としての他人との関係は、一方的で非対称な応答責任によって支えられている。「私」は他人に応答する可能性としての「責任」（responsabilité）のうちに呼び出され、そこに囚われの身になっているのである。この状況をレヴィナスは、「人質」と表現している。主体性は、逃れられない仕方で他者によって召喚されていることによって、「そもそもの初めから、人質として身代わりになること」、他者の代わりに下に身を置くこと、すなわち「臣従」（sujetion）という関係性によって構成されている。その意味で、主体性とは、応答するよう命令され、この命令に臣従するもの、「下に置かれたもの」のことである（AE 228）。これは主体の自由意志による選択の結果ではない。むしろレヴィナスによれば、他人たちへの応答可能性としての「責任」のうちに「私」を置き入れ、そこに「私」を人質の如く引き留めるのは、「選び」[23]と呼ばれる受動的な働きである。それゆえ彼は、他人の人質になるという関係性においては、主体の自己同一性の起源としての「現前」があらかじめ他者によって解体されていると述べている。

> 人質としての主体性。この主体性の概念は、自己への自我の現前を哲学の始まりないし哲学の成就と見做す立場を覆す。この現前とは同における合致であり、かかる合致において、私は起源であるかさもなけ

れば記憶によって起源を取り戻すのだが、この現前はそもそもの初めから他によって解体されているのである。（AE 202）

ここで〈同〉（le Même）と呼ばれているのは、自己への自我の「現前」によって「自分自身と同時的な一つの実体」と化す「超越論的な一つの〈自我〉（Moi）」（AE 95）の自己同一化の枠組みである。これに対し、人質としての主体性を成立させる「選び」との関係は、レヴィナスによれば、「現前しないもの」（non-présent）との関係であり、意識の「現在」のうちに囲い込まれないがゆえに起源たりえないもの、「無起源的」（anarchique）（AE 25）なものである。anarchie という語は、無秩序や無政府主義といった意味をもつが、ここでは秩序（ordre）に対立するような無秩序（désordre）ではなく、「始源／原理（principe）」、「アルケー／起源（archée）」として措定されえない様態を表現している（AE 159-160）。この発想により、「責任／応答可能性」のうちに置かれた主体性の構造は、「意識とは異なる仕方で」（AE 46）構造化されたものとして定義されることになる。

レヴィナスによれば、「責任」において他人へと応答するよう召喚されているのは、いかなる二重性も孕まない「一者」である。この一者の到来は、フランス語では「自らに～する」「（人に）～される」という被りを表現する再帰動詞のなかに登場する「対格」（accusatif）の se のように、他者の呼びかけに応じてその都度生起する「自己自身（soi-même）の再帰」（AE 166 等）として語り出されている。これは〈自我〉の自己同一性とは異なるものとして様々に説明されているが、なかでも「老いゆくこと」（*vieilissement*）（AE 87）の例が分かりやすいように思われる。以下、要点のみまとめておこう。

目に見えぬ仕方で押し寄せる年波に曝され、この年月の重みに従わされることで「私」は老いる。その意味で、老いることは言わば「永続的な自己喪失」（AE 90）である。しかし老いることで、「私」は離散消失して

別の人格になるわけではない。レヴィナスはこの矛盾した事態を、「老いゆく主体性は唯一無二で代替不可能であり、この私であって他の私ではない。にもかかわらず、それは〔…〕逃亡の余地なき服従のうちに意に反して存在している」（AE 88）と表現している。ここに彼は、因果論的には説明のつかない「一切の自己同一化の手前で被られる外傷」としての「他者による一者の息の吹き込み」（inspiration de l'un par l'autre）[24]を見出している。つまり、先ず自己同一的な〈自我〉があって、それが他者によって解体されるのとは違い、老いゆくことは、内側から他者によって息を吹き込まれることで絶えず異化され、その度毎に自己同一性を失いつつも、他者に鼓舞されて〈自己〉として応答する出来事だというのである。このように、「老いゆくこと」における触発は、あらかじめ自己のうちに植えつけられた何らかの原因によって定められた運命ではなく、他者によって自己が生起する出来事として捉えられている。

レヴィナスによれば、他者によって「召喚された者が自らに反して忍耐しつつ死に続け、その瞬間のうちで持続し「老いゆく」忍耐の同一性」のうちには、他者からの触発に曝され、傷つけられ、苦しむ一者の「供物の、苦しみの、外傷の可能性そのものとしての受肉」（AE 86）がある。つまり、「責任」に応じて再帰する一者は、自己への自我の現前としての「主題化」（thématisation）のうちにある〈自我〉の概念とは異なり、他者への「曝露」（exposition）のうちに身体として受肉しているのである[25]。それは、志向性の相関関係とも対話の相互的関係とも異なる〈同のうちなる他〉（l'Autre dans le Même）という構造[26]のうちに、一者が感応性（susceptibilité）、可傷性（vulnérabilité）、感受性（sensibilité）そのものとして受肉する出来事として語られている。

では、〈同のうちなる他〉としての主体性は、自己意識に基づく〈同〉としての主観性と何が異なるのか。第一に、ここで主体性は、意識による自己同一化作用に基づく同一性ではなく、他者に曝されることで保たれる単一性のうちにある。レヴィナスによれば、他者からの触発を被る「忍

耐」（patience）の受動性において、主体は「自己同一性を欠くが唯一無二の一者」（AE 90）として生起する。いかなる二重性も含まないこの一者の単一性は、内側から放棄することのできない「責任」の代替不可能性として成立するがゆえに、これをレヴィナスは、自己意識における自己同一化の背後で引き起こされる「純然たる選びの自己同一性」（AE 227）と呼んでいる。つまり人質の様態における「自己自身（*soi-même*）の主体性」は、絶えず応答を迫られる動態にあって、「前綜合的で前論理的な、そしてある一定の意味で原子的な――換言すれば不分割の （in-dividuelle）――統一性」（AE 169）を保つのである。

第二に、この一者の単一性は、「絶対的に受動的／情動的な「綜合」」（AE 66）[27]によって支えられている。絶対的に受動的であるということは、受容して能動性に転じることが出来ないということである。先に見たように、刻一刻と「老いゆくこと」において、「私」は、自分を老化させるこの触発を、意識によって再現前化することも、意志によって回避することもできないのであった。これと同様に、「選び」による一者の召喚は、意識によって起源として回収しえない、隔絶した「過去」のうちで生起するとされる。創造の出来事ですら、再現前化されるやいなや意識の「現在」のうちに回収され、「始源／原理」として措定されるのに対し、「選び」は、意識の「現在」のうちに回収しえないにもかかわらず、すでに一者を生起させることにおいて成就してしまっている、主体性の起源に先立つ出来事なのである。つまりそれは「前起源的」であり、起源になりえないという意味で「無起源的」な「過去」だと言える。それゆえ、1968 年の論稿「人間主義と無起源」において、意識の生から絶対的に分離した「過去」と結びついた主体性は、「前起源的な感応性」（susceptibilité préoriginaire）（HAH 83）と呼ばれている。このように、レヴィナスは、「選び」という出来事において、原因による結果の支配に基づいて考えられた「存在論」の用語では説明しえない、他者による一者の触発が成立すると考えている。

前節から見てきた主体性の起源をめぐる考察を踏まえるなら、以下の

ようにまとめることができよう。存在論的差異に基づく癒着関係からみるならば、存在者としての「私」は、起源ないし原因としての存在によって支配される構図のもとにある。「私」は存在しないことの論理的な不可能性のうちに縛られているからである。それは、存在の内在性への繋縛という厳然たる事実を前にして「吐き気」を覚え、あるいは「恐怖」を抱く現象に着目して語られたように、「悪／苦痛」の現象において露わになるものであった。これに対し、他人たちの代わりに応答するよう「私」に命じる「選び」との関係性において、「私」は、他人に応じないことの倫理的な不可能性[28]のうちに置かれている。「私」は取り返しのつかない仕方で選ばれているがゆえに、この「責任」を放棄することは出来ないのである。それは、他者に曝され触発を被る「忍耐」の現象において成立する根底的な受動性であった。

しかしレヴィナスは、主体性を、外在的な要因に基づいて規定しているわけではない。自他の相克が生じるような枠組みとは異なり、「責任」における主体性は、他者によって自己の主体性が保たれる〈同のうちなる他〉という枠組みのうちにあるからである。先に述べたように、代替不可能な「責任」への「選び」は、隔絶した「過去」と「現在」のあいだの癒着なき結びつきの秩序のもとで生起するため、意識によって主観の自己同一性のうちに回収しえない。それゆえ、この「選び」によって強制や隷属の意識が生じることはないと考えられる。「選び」は「私」から主体性を奪うのではなく、「臣従すること」をその使命とする主体性を内側から支えているからである。この構造によって、一者は、自己同一的に完結することのない他者への超越様態のうちに、人質ないし身代わりとして再帰することになる。

他者の働きが自己のうちに宿るような仕方で成立するこの〈同のうちなる他〉の時間構造において、人間の主体性は、権能と隷属、能動性と受動性の二項対立を超えたありかたとして成立する。ここにこそ、レヴィナスが、自然本性でも存在本質でもなく、他者に対する「責任／応答可能

性」によって人間の主体性を規定する狙いがあるものと思われる。「責任」とは、彼の枠組みによれば、主体の権能という意味における能動性でも、他者への隷属という意味における受動性でもなく、この二項対立図式そのものに先立って主体性を生起させる「選び」に対する根底的受動性のうちで成立するものである。この「責任」に依拠することで、因果論的ではない仕方で主体性の「創造」を語ることが可能になるのである。

そもそも、何ものかによって「創られる」ということのうちには、自然発生的に「生まれる」という発想にはない受動性があるが、この受動性は、創造の業が被造物に内在する「始源／原理」として回収される場合には問題にならないものである。意識の「現在」を起点に起源を我有化し、自己を含む一切の現象を掌握する主観性の枠組みでは、この側面は見落とされてしまうからである。これに対しレヴィナスは、意識が定位する「現在」のうちには回収されず、そのかぎりで起源として把握されえない「選び」の過去との関係に依拠することで、「被造物」に固有の受動性が成立する時間構造――「隔時性」――を語っている[29]。このように、因果関係によって結ばれていない「無起源」にして「聖潔」なる他者[30]によって召喚される「被造物」としての人間に光を当てることで、レヴィナスは、アルケー（起源／始源／原理）の認識を前提とした哲学的枠組みを転倒しているように思われる。

終わりに

本稿においてわれわれは、主体性の起源をめぐるレヴィナスの議論を整理することで、「創造」という論点を、存在と人間のあいだの関係を因果論的連関として捉える発想をのりこえる戦略として解釈してきた。彼は、存在からの個別化の枠組みで捉えられてきた「創造」の問題を、他者に呼び起こされ応答する枠組みのもとで捉え直している。それは、存在することを「悪／苦痛」として感受する「私」の生を起点に「内部性」の成立可

能性をめぐる問いを提起する、初期からの考察と結びついたものであった。レヴィナスは、創造の業との連関のもとで人間を「被造物」として規定することで、人間の主体性が、他者という「外部性」との連関のもとに、存在作用から分離した一箇の「内部性」をもつ可能性について考察していたのではないかと思われる。

存在を起源として措定するのではなく、他者と一者の間に結ばれる〈同のうちなる他〉という関係のうちに人間の主体性を位置づけるレヴィナスの議論は、主体性論としては極めて特異なものである。しかし、自らの起源に先立つものによって規定される「無起源」という発想を発明して超越論的主観性の枠組みを転覆し、「隔時性」と呼ばれる時間性のうちで主体性を新たに定義する彼の議論は、従来のヒューマニズムとは別の仕方で人間の固有性を思考する取り組みとして解釈されうるものである。先述したように、レヴィナスは、西欧のヒューマニズムの伝統において、「人格」概念が自らの目的であると同時に起源でもあるような自己同一的な実体として想定されていること（AE 203）に異を唱えている。主体性の起源をめぐる彼の議論は、他者の超越性に基づく「選び」によって時間性のうちで生起するありかたを、人間に固有の姿、「人間なるもの」として描き出す点に特徴があるのではないかと思われる。

（むらかみ・あきこ　慶應義塾大学文学部助教（有期・研究奨励））

※　本稿は、日本哲学会第七二回大会（2013 年 5 月 12 日 於お茶の水大学）における口頭発表を元にしている。発表時およびその後の推敲過程で貴重なご質問やご意見を賜った皆様に感謝申し上げます。

Le problème de l'origine de la subjectivité chez Lévinas

Akiko MURAKAMI

Emmanuel Lévinas est connu pour avoir critiqué « l'ontologie » et mis l'importance sur « l'éthique », relation avec « Autrui » comme infini irréductible à la totalité. Pourtant, certains thèmes autres que « l'éthique », tels que la création et la sexualité, se trouvent dominants dans ses premiers articles. Quelle problématique soulève-t-til dans son argumentation sur « l'homme en tant que créature ou en tant qu'être sexué » ? Il ne serait pas inutile pour comprendre la nécessité du tournant « éthique » d'essayer de mettre en lumière la problématique derrière ce genre de thèmes. Afin d'en prendre le chemin, nous nous occuperons ici du problème de la création, pensé chez Lévinas comme celui de l'origine de la subjectivité.

D'abord, nous verrons pourquoi Lévinas rejette la conception de l'être en tant qu'origine ou cause de l'homme, et comment les thèmes de la création et de la sexualité sont traités dans le cheminement de sa pensée. Nous tenterons ensuite d'extraire la problématique derrière la critique de « l'ontologie » en nous appuyant sur ses articles de 1930 à 1950. Enfin, en examinant la structure temporelle de la subjectivité qu' à partir d'environ 1965 Lévinas nomme « diachronie », nous considérerons l'objectif de son argumentation sur le surgissement d'un « soi » en tant que créature. Nous voudrions à la fin de notre analyse arriver à comprendre le rapport entre « la responsabilité » envers Autrui et « la créaturialité » du sujet dans la pensée lévinassienne.

※　以下の著作からの参照には以下に示す丸括弧内の略号を示し、拙訳を用いる（下線は斜体部分、〈〉は大文字表記の訳語に付し、省略は〔…〕で表すこととする）。

LÉVINAS, Emmanuel, *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Barcelone, Kluwer Academic, 1974, Paris, Martinus Nijhoff, 1978, 5e éd. 2006 (AE). *De l'existence à l'existant*, Paris, J.Vrin, 1947, 2e éd. augmentée 1978, 2004 (DEE). *De Dieu qui vient à l'idée*, Paris, J.Vrin, 1982, 2e éd. 1998 (DVI). *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, Paris, J.Vrin, 2e éd. augmentée 1967, 4e éd. 2006 (EDE). *Entre Nous, Essai sur le penser-à-l'autre*, Paris, Bernard Grasset, 1991 (EN). *Humanisme de l'autre homme*, Paris, Fata Morgana, 1972 (HAH). *Les Imprévus de l'histoire*, Paris, Fata Morgana, 1994 (IH). *Quatre lectures talmudiques*, Paris, Minuit, 1968, 2005 (QLT). *Le temps et l'autre*, Paris, Fata Morgana/P.U.F., 1979, 9e éd 2007 (TA). *Totalité et Infini, Essai sur l'extériorité*, Hague, Martinus Nijhoff, 1961, 4e éd. 1984 (TI). *Œuvres 1: Carnets de Captivité et autres inédits*, volume publié sous la responsabilité de R.Calin et de C.Chalier, préface de J.-L.Marion, Paris, Bernard Grasset/IMEC, 2009 (Carnets).

HEIDEGGER, Martin, *Sein und Zeit*, Tübingen, Max Niemeyer Verkag, 1925, 2006 (SZ).

1　公刊著作におけるこれらの主題の登場順序については本稿中で触れるが、2009年から始まった著作集の刊行により、生前の未刊草稿に基づく調査も進んでいる。本稿では基本的に草稿群は取り上げないが、捕囚期を含む 1937-50 年のメモで、レヴィナスが「最初から創造と選びの過去を起点として理解される「私」」（Cf. CALIN, Rodolphe et CHALIER, Catherine, « Préface », dans Carnets 22）から出発する戦略を取り、また「エロス」についての哲学的草稿とそれに関連する小説素案を残していることについては、著作集の編者も指摘するところである（*op.cit.*, 14-15）。

2　他人との関係はむしろ「宗教」（*religion*）と呼ばれ、対話の本質は「祈り」（prière）と規定されている（EN 20）。

3　l'humain は形容詞の名詞化であり、「人間」とも「人間的なもの」とも訳しうるが、われわれは、この語の特殊性を際立たせるため「人間なるもの」と訳している。なお本稿は「レヴィナスにおける「人間なるもの」について――倫理思想と宗教思想の関係に着目して――」の題目で受けた学術振興会科学研究費による研究成果の一部である。

4　「エロス」と「多産性」と名付けられた項目を参照されたい（TA 77-89）。

5 ただし『存在するとは別の仕方で』には主体性を「母性」（maternité）として規定する記述（AE 123 等）がある。これは子との関係性に着目した概念であっ

て必ずしも「エロス的関係」の枠組みを前提とするものではないと考えるが、これについては本稿の範囲を超えるため別稿に譲りたい。

6 「〔…〕「無からの創造」の観念が表現しているのは、全体性には統一されることのないような多数性である。」（TI 78）

7 『実存から実存者へ』、『実存の発見』期の existence という語には、のちに être や essence で表される「存在すること」という動詞形の含意が込められている。レヴィナスは、「実存する（exister）という動詞の他動詞的性格」（EDE 143）を発見し、「人間的存在の「諸々の固有性」の総体を実存分析としてやり直す」（EDE 142）可能性を拓いた「実存哲学」（philosophie de l'existence）（EDE 141）を意識してこの語を用いているので、訳語としては「実存」を用いるが、後の思想との連関を示すため内容的なまとめにおいては「存在」で代用する。

8 « De l'évasion » (以下 DE), dans *Recherches philosophiques*, N°5, Paris, Vrin, 1935, 375.

9 「吐き気の中には、そこに留まることへの拒否、そこから脱出せんとする努力がある。」（DE 386）「吐き気そのものにおいては、その充溢性と仮借なき現前性のうちにある存在の裸性が見出される。」（DE 387）

10 « Il y a » (以下 Il y a), dans J .Wahl (éd.), *Deucalion : être et penser*, N°1, Paris, Revue Fontane, 1946, 150.

11 レヴィナスはこの状況を例示する際に、ハムレットの独白や、ポーの小説『息の喪失』の一幕を挙げている。「ハムレットが「在らぬこと」を前にして尻込みするのは、彼が存在の回帰を感じ取っていたからに他ならない（死ぬか、眠るか――眠れば夢も見よう）。」（Il y a 151）「生き埋めにされることへの恐怖、それは、死が十分に死ではないのではないか、死において人は存在するのではないかとの疑念であるが、それはエドガー・ポーにとって根底的な感情であったように見える。」（Il y a 149）

12 LÉVY-BRUHL, Lucien, *Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures*, Paris, F. Alcan, 1910, 28-29.

13 レヴィナスは、「恐怖が支配的情念であるような実存を記述するためにレヴィ=ブリュールが導入した「融即」の観念の新しさは、「聖なるもの」が惹起する感情を記述するためにそれまで用いられていた諸範疇を破壊したことにある」（Il y a 149）と述べている。「聖なるもの」との関係を「融即」の様態として捉えるこの発想は、その後もしばしば登場し、こうした様態とは別のありかたである「聖潔なるもの」との関係として他人の「顔」（visage）を規定する際にも前提とされている。

14 レヴィナスは、ハイデガーの「存在論的差異」という発想によって「観念論者

の哲学にとっての存在の悪、質料の悪が、存在することの悪／苦痛となる」« le mal de l'être, le mal de la matière de la philosophie idéaliste, devient le mal d'être »（DEE 19）と述べている。

15　この二つの問いの対比はレヴィナスの議論に繰り返し登場する。後年の論文「超越と苦痛」（1978 年）では、「なぜ善ではなく、悪が存在するのか」という問いは、「なぜ何ものかが存在し、無があるのではないのか」よりも人間にとって根源的な問いであり、「存在の脱中立化」を果たす「最初の形而上学的問い」と呼ばれている（DVI 201）。

16　実詞的なものを欠いた存在への「融即」様態としての「ある」に着目して、動詞から実詞への「イポスターズ／位相転換」（hypostase）によって「実存者」が「意識」として成立する様を描き出す『時間と他なるもの』（1948 年）の議論を参照されたい（TA 24-34）。この著作には「内部性」の語は一度も登場しないが、それは「糧」の「享受」に関する記述のうちで示唆されており、内容的に連関する『実存から実存者へ』（1947 年）でも「内側と外側を持つ」（DEE 73）ありかたとして規定されている。のちに『全体性と無限』（1961 年）で「内部性」という主題に多くの頁が割かれることを鑑みるなら、レヴィナスはこの時期から存在者が生起して「内部性」をもつ仕方を考察することに重きを置いていたと推察される。

17　そのなかには、ハイデガー的差異の両項（存在／存在者）を転倒しているだけでレヴィナスの思想もまた「存在論的差異」を前提としており、それゆえ「他者への存在論の範囲を超えない」と批判したマリオンの『偶像と隔たり』（1977 年）などがある（MARION, J.-L., *L'idole et la Distance. Cinq études*, Paris, Grasset, 1977, 1989, 278.）。

18　マリオンの批判に対するレヴィナスの反論は、翌年『実存から実存者へ』第二版への序文（1978 年）にある（DEE 12）。これを受けてマリオンは解釈を変更している（MARION, J.-L., « Note sur l'indifférence ontologique » dans *Emmanuel Lévinas : l'éthique comme philosophie première*, Paris, Cerf, 1993, 62.）。

19　Cf.捕囚期の手帳には、「存在を被造物と呼ぶ」ことは「意味を付与する」ことであるという記述がみられる（Carnets 128）。

20　レヴィナスは、1965 年の論稿「志向性と感覚」において、「隔時性」という概念を、「構造論的共時性」（synchronisme structural）という概念に対置している（EDE 222）。これは、ソシュールにおいて、静態的に言語を分析する「共時言語学」と時間の移り変わりを踏まえ動態として言語を分析する「通時言語学」（linguistique diachronique）が区別されたことを受けての用語選択と思われるが、意味している内容自体は大きく異なる。レヴィナスにおいて diachronie は「通

時性」ではなく「隔時性」と呼ぶべき瞬間の非連続性に基づく時間性を表現しているからである。

21 主体性と主観性はいずれも同じ subjectivité の翻訳であるが、後者には、西欧近代の哲学理論に登場する超越論的主観としての含意が強く込められていることから、本稿ではこの二つの語を訳し分ける。

22 カランのまとめによれば、想起の時間性は、意識によって再現前化されることで「現前」のうちに絶えず取り戻されるのに対し、「隔時性」としての時間性は、一切の集摂に抵抗する回収不可能な時間の断絶を含む時間構造である（CALIN, Rodolphe, « La voix du soi, ipséité et le langage chez Lévinas » dans *Alter, Revue de Phénoménologie*, N°5, Fontenay-aux-Roses, Alter, 1997, 261/271.）。

23 「存在のうちなる自己（*soi*）、それはほかでもない、いかなる一般性も目指すことなき召喚から「逃れることはできない」ということである。私と他人たちに共通の自己性なるものは存在しない。他人たちとの比較がなされるや否や、比較のこの可能性から排除されること、それが私である。したがって自己性とは、〈自我〉ではなく私を選ぶ、正当化しえない特権ないし選びなのである。選ばれた唯一者たる私。臣従による選びである。」（AE 201）

24 「他者によって一者が触発されること――それは無起源的な外傷、他者によって一者が息を吹き込まれることであって、機械的な仕方でその動因に従属させられる質料に刻印される因果性ではない。」（AE 196）

25 「一者は、自分を傷つけるものに曝された皮膚のように、自分を打つ者に対して差し出された頬のように、他者に対して曝される。」（AE 83）

26 「主体性とは〈同のうちなる他〉であり、対話において対話者たちが互いに対して現前する様相とも異なる。対話において対話者たちは平和裡に共存し、互いに合意している。これに対し主体性の〈同のうちなる他〉は〈他〉によって不安を掻き立てられた〈同〉の動揺である。志向性の相関関係ではないし、互いの本質的な相互性のうちで存在本質を証示されるような対話の相関関係でもない。」（AE 46-47）

27 この「受動的綜合」という語が示すように、レヴィナスの議論は、フッサール現象学における「原印象」（Urimpression）の問題を継承するものである。レヴィナスは、『全体性と無限』と『存在するとは別の仕方で』のあいだの時期に「原印象の現象的不在」（DRABINSKI, John E., The Sensibility and Singurality. *The Problem of Phenomenology in Levinas*, Albany, State University of New York Press, 2001, 202.）という発想を導入することで、この「原印象」を一度現前したもの（把持されたもの）の再現前と見なして観想的志向の優位性を保つフッサール（*op.cit.*, 195）に対し、それを現前化不可能なもの、「前現象的」な「起源に

先だつ起源」と捉える（*op.cit.*, 202）発想を示し、「フッサール現象学の純化」（*op.cit.*, 196）を試みているとされる。

28　他者による命令は、この命令に違反することが直ちに「責務不履行」になってしまうような「純粋に倫理的不可能性」として抹消しえないものであるが、存在者が存在せざるを得ないという事実によって浮き彫りになるような「存在論的必然性」ではないとされる（AE 213）。

29　同じ構造は、1964 年のタルムード読解「誘惑の誘惑」で、イスラエルの民が神ヤハウェから下された命令に従う構造を説明する際にも登場している。そこでレヴィナスは、他者によって下された命令を理解するよりも前にその命令に従ってしまっているような「絶対者にとらえられた主体性」（QLT 104）を語っている。

30　レヴィナスは、存在と存在者との癒着関係を「聖なるもの」（le sacré）との合一に喩え、そこからの分離を告げる「聖潔なるもの」（le saint）という発想を重視している。「分離」（séparation）や「絶対化」（absolution）の動性を含意するこの「聖潔」概念は、自他の「融即」様態から自他の分離が保たれる人称的な関係性を区別する際にしばしば登場しているが、この「分離」が生起する時間構造についての説明は、1960 年代の記述法の変化に伴って前面に現れている。例えば『全体性と無限』（1961 年）においては、再現前化する意識に基づく思惟が「遅れてきたのに先立つ」（*antérieure postérieurement*）（TI 144）ものとして世界から距離を取り、自らを分離すると述べられていた。そこで自我は、他者に遅れて出頭するにもかかわらず、この遅れを忘却することによって、あたかも自らが「起源」にあるかのごとくに定位するとされたが、この「遅れ」そのものについての明確な説明は見いだせなかった。これに対し、『他なる人間の人間主義』（1972 年）や『存在するとは別の仕方で』（1974 年）、講義録『神・死・時間』（1975-76 年）に結実するその後の議論においては、遡りえない「過去」との関係性としての「彼性」（illéité）や、他者の再現前化不可能性そのものを告げる「痕跡」（trace）といった 1963 年頃に登場する概念、また、その後に登場する「無起源」（anarchie）や「隔時性」（diachronie）の概念によって、この他者に対する自己の「遅れ」がより詳細に説明されるようになっている。なお、いくつかの鍵語については他の論稿で扱ったため、本稿では、特に「無起源」や「隔時性」の概念に焦点を絞った説明を試みている。